

あらすじ

語り手 山口忠光さん
(明治40年生まれ)
昭和63年8月20日収録

昔あるところに猟師がおおて、毎晩毎晩鉄砲撃ちに出ている。ある晩もいつもの通り鉄砲の弾を込めていたら、いつもななしに囲炉裏の隅から自分の飼猫が、それをじっと見て、猟師が弾をいくつ込めるのか数えていたのだって。

それでも鉄砲撃ちは何にも知らずに鉄砲に弾を込めた後、出る支度をし、それから、ご飯を食べようといつと見たり、いつもあるはずの茶釜の蓋がない。

「あれっ、いつも蓋があるのに今日はな

猟師の隠し弾

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

狩猟のときの猟師の心得

食って出た。実は鉄砲撃ちが鉄砲に弾を込めるのを見ていた猫が、その茶釜の蓋を持って逃げたのだ。それとは知らずに鉄砲撃ちは飯を食ってから出かけて行った。山の尾を撃ったけれど、みんなカーンとはじかれてしま

食って出た。

んが出たのだって。

った。

「ああ、こいつ、何者だ」と思っ

こっほり。

解説

「あらすじ」ではなく、語りそのままである。猟師の心得として、人里離れた山などへ狩猟に行くときには隠し弾を持

それは猫が茶釜の蓋を

持って、鉄砲撃ちが弾を撃つと、その蓋を前へ出してカーンと当てる。山は聖地ではないので、同時に異界である。妖怪の跳梁するところでもあつた。観念知らずに、その蓋を離しが生み出した話と思われる。 (元鳥取短期大学教授 (水曜日に掲載) のだつて。